

## 第五の門

「これより会議を始める」

適度に使い込まれて重厚な輝きを帯びた卓を囲む錚々たる面々に向かって、議長はゆっくりと視線を動かしながら重々しく宣言すると共に、最高評議会危機対策会議の第二回会合が開会した。

最高評議会は、かつて政府や議会の要職を歴任した、いわゆる元老が国民の負託を受けて構成する、いわば国家の最高権威である。

と同時に、国政の大半は政府と国民議会に委ねられていた為、実質的な権限は殆ど与えられていないに等しい。

最高評議会は、政府や国民会議の主導する政策に対して、“権威”という名のお墨付きを与えるだけの名目的な存在に過ぎないとして、最近では最高評議会の廃止を主張する声も出始めているくらいだ。

それ故に、最高評議会主催の会議が行なわれるのは極めて異例であり、また、それは国家の存亡に関わる極めて重大な危機に直面した証でもあった。

「まず、先の会議でフェイ博士から発せられた重大な警告についてだが、この場にご足労頂いた皆様には、予め警告の大まかな内容が伝えられているものと思う。そこで、皆様の各専門分野の見地から、フェイ博士の警告に関する見解を伺いたい」

フェイ博士とは、気象学の第一人者とされる学者である。

そもそも、最高評議会危機対策会議の第一回会合は、フェイ博士から為された警告の重大性に鑑み、今後の対策を検討する為に行なわれた。

我々の住む星、惑星マルスでは、この十数年来、全惑星規模に及ぶ砂漠化の進行に悩まされていた。

国民議会の意を受けた関連分野の研究者が、原因の追求に躍起になっていたものの、砂漠化が進行するメカニズムの解明には至らず、有効な解決策も掴めないまま手を拱いている状態だった。

そんな中明らかにされたフェイ博士の最新研究によれば、砂漠化の影響が遂に我々人類の生存をも脅かしかねない事態に突入しつつあると言うのだ。

博士は、砂漠化……つまり森林の減少は遂に大気の組成に影響を及ぼすレベルにまで達し、今後十年から数十年のうちには、マルスの大気は人類の生存に適さなくなる可能性があると言う。

事の重大性ゆえ、会議は極秘裏に、マルスが誇る関連分野の専門家を招いて行なわれた。議長の迅速な議事進行手順に従って、会議に招聘された学者達は、自らの専門分野から見たフェイ博士の警告に対する意見を述べていった。

皆、少々伏し目がちに、喉の奥に詰まった物を吐き出す為に苦悶している様な重苦しい口調で、フェイ博士の警告を肯定する見解が順次述べられていく。

そうして改めて明らかになった惑星マルスを取り巻く環境は、フェイ博士の警告をも上

回りかねない、極めて深刻な危機に見舞われていると言う結論に至った。

これまでも、各分野の専門家が自分の専門分野に限った環境変化の予測……と言ったものは行われていたのだが、今回の様に複数の分野に渡る横断的な状況分析が行なわれるケースはなかったから、各専門家も『自分達が認識している小さな異常が、結果的にどのような事態の進行を意味するのか？』という全体像の把握にまでは結びつかなかったのだ。

しかし、フェイ博士の警告がきっかけとなって、各分野の権威が再調査した結果、フェイ博士の見解が紛れもない事実であり、地域によっては既に何らかの影響が出始めているか、少なくとも数年中には具体的な兆候が現れる可能性を指摘した。

会議に招集された専門家全員からの意見聴取が終わり、議長が議事進行を促そうと口を開きかけた時、一見、この場には関係がなさそうに思える歴史学者のドーレス博士が声を上げる。

「議長、私は当初、『どう考えてもこの場に呼ばれるべきではないだろう』と感じておりましたが、せっかく同席しているのですから、一言意見を述べさせていただきます」

「何だ……君か。私も君がこの会議に同席している意味を図りかねているのだが、ドーレス君を招聘した理由は何だね？ 副議長」

「それが、一応過去の天変地異に関する記録にでも、今回の危機に関連するケースがあれば、何らかの参考になると思ったのですが……」

「なるほど。では、ドーレス君の意見を聞こうじゃないか」

室内の全員が注目する中、ドーレス博士は全員の視線を少々気にしながらも、おずおずと話し始めた。

「それでは……。まず、副議長の言われた過去の天変地異に関する記録についてですが、少なくとも科学技術の発達著しいここ数十年につきましては、こちらにおられる各分野の専門家の方々を前にして、私が出る幕はないでしょう。そこで、それ以前の天変地異に関する記録について申し上げますと、皆様もご存知の歴史的に有名な天変地異の記録は、現在でも幾つか残されております。しかし、詳細な内容にまで踏み込んでいるものは殆ど皆無と言ってよい状況でして、辛うじて残されていたとしても被害規模に関する記録がせいぜいで、その原因にまで踏み込んだ記述は、私の知る限りでは存在しません。つまり、フェイ博士の警告する危機について、過去の歴史資料から何らかの教訓を得るのは不可能でありましょう。そもそも、フェイ博士の警告同様の危機に見舞われた過去の記録自体が存在しませんので、私の立場から申し上げるのは『未曾有の危機に直面している』という事くらいでしょうか」

「大方予想はしていたが……君に改めて『未曾有の危機』と強調されなくとも、我々が既にその認識を共有している事は言うまでもない。それにしても、やはり過去の歴史から我々の直面する危機に対処する術を学ぶ余地はなさそうだ。結構。ドーレス君、座ってくれたまえ」

「お待ち下さい、議長」

「何だね？ ドーレス君」

「私の話はまだ終わっておりません。ところで、議長を始め、この場にいらっしゃる皆様は、当然『惑星マルスの創世神話』をご存知だとは思いますが？」

「無論だ。しかし、創世神話とこの度の危機に一体どの様な関係があると言うのかね？」

「まさか、また下らない君の突飛な仮説の披露に、我々の貴重な時間を費やそうと言うのではあるまいな？」

ドーレスと議長との間に割って入ってきたのは、最高評議会議員でもあるハイマン大主教だった。

「下らんとは何事です。確かに大主教のお立場からすれば、『私の仮説は面白くない』と言う感情的な反応を理解できなくはありません。しかし、よろしいですか？ 皆様も良くご存知の創世神話によれば、我々をこの世界に生み出した母なる神々は、天界から舞い降りたのです。こちらにお集まりの方々の中には、私の仮説をご存じない方もおられるでしょうから、掻い摘んで申し上げます。私は、かつて天から舞い降りた神々の正体を、我々よりも遥かに進化した生命体……ありていに言えば宇宙人ではないかと疑っております。そして、その疑問を解く鍵が遺跡に眠っているのです。これまで遺跡は信仰上の戒律によって、何人たりとも立ち入る事を許されて来なかったのですが、今こそ開かずの扉に手を伸ばす時期ではないでしょうか」

「何とも不敬な事を……。 “遺跡を守護し、崇め奉るべし。何人たりとも決して立ち入るなかれ” ……とは、五千年来忠実に守られてきた戒律なのだ。それを己の突飛な仮説の立証とやらの為に違える等、教会を束ねる私の立場ではとても許可は与えられぬ。口を慎まぬと、博士の研究活動そのものを改めてもらわねばならぬ事態となるだろう」

「それは脅しですか？ 大主教のお立場は分かりますが、では、何故遺跡の場所が予め示されておきながら、敢えて『立ち入ってはならぬ』と戒律を定められているのだとお考えですか？ 私は、大主教を始め、この場に同席されている方の大半が考えておられる様に、『創世の神が人智を超える存在だ』とは考えておりません。我々よりは遥かに優れてはいるけれども、しかし我々と同じ生命なのです。そして、彼らは何らかの理由で、この星に我々を誕生させたのです。五千年程前に……」

ドーレスは苦虫を噛み潰した様な表情の大主教、同じく決して快適な気分とはいえない表情の議長を始めとした最高評議会の面々、そして、呆気にとられた表情の専門家の面々を前にして、それでも半ば自棄になって言葉を継いだ。

不敬罪で拘束される事態を覚悟の上で、この際言うべき事は全て言ってしまおうと居直っていた。

「そして、あの遺跡が今もこうして残されている理由は、まさに我々が現在直面している様な、自身の生存をも脅かされる危機の遭遇に備えて、あなた方流の言葉を使えば、創世の神々が用意して下さっていたのではないかと思います。平時は信仰を頑なに堅持している者でも、この星そのものの危機に際してみれば、例えそれが戒律に触れる背信行為であったとしても、自らの運命を掛けて足掻いてみる意味はあるのではないのでしょうか？ 今やどの様な意味があるのかも分からぬいにしへの戒律に縛られて、身動きが取れないま

ま静かに死の時を待つのか、もしかしたらあるのかも知れぬ神の罰を覚悟してでも、一か八かの可能性に掛けてみるか。我々が選択するべき道は明らかでしょう。是非遺跡の調査をさせて下さい」

ドーレス博士の言葉を受けて、しばしの沈黙が室内を占拠する。

重く湿った空気に、誰もが『この沈滞した雰囲気破って欲しい』と、祈る様な目線を所在無しに漂わせる中、議長がおもむろに口を開いた。

「ドーレス君の言い様は誠に傲岸不遜であり、我々と同じ神の徒とはとても考えられぬが、一方、ドーレス君の言葉にも一理あると私には思える。もし、遺跡がドーレス君の予想通りに、神が予めこの様な危機に対処する為に我々に残されたものであり、しかし滅多な使用は差し控えさせる為に、敢えて戒律を定めて立ち入りを厳禁したのだとしたら、話としての筋は通るし、我々はそれこそ神の深い御心に感謝せねばならぬ」

「では、議長……」

一同の気持ちを察して言葉を挟んだのは副議長だった。

しかし、議長は副議長の問いかけに臆する事もなく、敢えて自ら火中の栗を拾う覚悟を固めて言葉を継いだ。

「うむ。異論はあろうが、この際、ドーレス君の珍説の真偽を確認すると言うだけでも、何もせずに死を待つよりは遥かに意義深いと思うが……」

「しかし、それでは、ここにハイマン大主教も同席しておりますし……」

「大主教の立場は理解出来ないではないし、私は今でも敬虔なる神の徒であると自負しているつもりだ。避けられるならばこの様な手段を取るべきではないだろう。しかし、ドーレス君の述べるまことに不敬なる方法に因らずして、この難局を打開する手段があると言うのかね？ 副議長」

「……」

議長の問いかけには、敢えて異議を唱えた副議長も、自らの立場との兼ね合いから難しい対応を迫られるハイマン大主教も、それ以外のこの場に居合わせた他の者も、明確な答えを出す事は出来なかった。

再びしばしの沈黙を隔てた後、一同の意思を確認したと判断して議長が口を開いた。

「全員が肯定的……という訳ではないが、少なくとも反対の意思がない事だけは確認したと言ってよいだろう。最高評議会の決定として、ドーレス君に遺跡の調査を許可しよう。しかし、許可すると言ってもドーレス君の好きな様に調査させる訳にも行かぬだろうから、調査に際して条件を課する事にしたい。本来ならば、最高評議会議員でもあるこちらのハイマン大主教にも同行をお願いしたい所ではあるが、生憎と大主教はご高齢ゆえに、無理を強いる事も出来なからう。そこで、大主教の指名する代理人をドーレス君に同行させて、その者の許可する範囲内での調査を行うという事ではいかがか？」

「議長、調査を許可していただきありがとうございます。しかし、私はこの件でこれまでも再三教会に遺跡調査の許可を求めていたにも関わらず、いずれも却下されてきたと言う経緯があります。ですから、その様な制限を与えられては、取り合えず遺跡の中には

入ってみたものの、結局碌な調査も出来ずに終わってしまいかねません。元々教会は遺跡探索に反対なのですから……」

「では、どうしろと言うのだね？ ドーレス君。君の要請は教会にとって……いや、我々マルス星に住む一千万市民にとっての常識を超えた不敬な振る舞いなのだ。この様な非常事態でなければ到底許可される見込みがない筈だった……と言う事実を、もう少し重く受け止めてもらいたいものだ」

\*

ドーレスに付き添って遺跡探索に同行する事になったのは、サムソンと言う名の青年だった。

「サムと呼んで下さい」

微笑みながら気さくに話しかける青年は、ドーレスの知る限りでは、教会に所属する人物としてはかなり異質であった。

「それにしても、この様な形であの高名なドーレス博士に直接お目にかかる機会を得られて、とても光栄です。先生の提唱された『創世の神々は天より降り立った宇宙人』説には、以前からとても興味がありまして、先生の著作や、何らかの形で発行される論文には全て目を通しているんです。所詮は素人の手習いではありますが、私も先生の仮説に触発されまして、個人的に色々調べているのです。そこで、先生にお会いする機会があったらこれも聞こう、あれも聞こうなどと常々考えていたのですが、こうしていざご本人を目の前にすると緊張してしまっ……」

——緊張と言う割には、ペラペラと良く喋る男だ。

敢えて本人の目の前で口に出すつもりはないが、いにしへの戒律と伝統を頑なに守り続ける事だけが存在意義でもあるかの様な、この世界で最も保守的かつ教条的な組織と言える教会と、目の前の男とでは余りに不釣り合いだと思う。

この若さと言いい、口先から生まれて来たのではないかと疑いたくなる程良く回る舌と言いい、教会もまた随分と風変わりな人物を抱えているものだ。

この男がどこかの町の教会に派遣されて、多くの庶民を相手に説教をする姿は、ドーレスには想像がつかなかった。

「失礼ですが、サムソンさん。あなたはどちらの教区におられる司教様ですか？ 私も個人的に何人かの司教と面識がありますが、あなたとは初めての対面になりますので。それに……しかも、お若い。最近司教になられたとか？」

ドーレスの問いかけに、サムソンは大げさに驚いた表情を浮かべながら、大仰な身振り手振りを交えつつ慌てて否定した。

「滅相もございません。私は、教会の記録院付きの一介の修道士に過ぎません。それをよりによって司教様などと、勘弁して下さい」

——まさか、とは思ったが、一介の修道士とは。

ドーレスはここに至ってようやく目の前のサムソンの若さ、そして落ち着きのなさの理由を理解したが、今度は逆に教会の意図を図りかねて首を捻った。

教会にとっては、教義の根本にも関わる重大事と言って差し支えない筈の遺跡探索に、よりによって一介の修道士を同行させるというのだ。

遺跡の調査を巡る教会とのこれまでの確執や、遺跡調査の許可が下りた際の大主教の不満気な表情を見る限りでは、調査に同行させる人物も主教クラスか、もしくは名の知れた司教にでも委ねた上で、調査に対して様々な制約を加えるに違いないと、半ば覚悟を決めていたのだ。

にも拘らず、一介の修道士が随行では、少々調子抜けもしたし、逆に教会や大主教の意図を勘繰ってしまうが、少なくとも調査そのものについては、教会のお偉方に逐一文句を言われるよりは余程やりやすい。

「そうですか、よろしく」

ドーレスは素っ気なく手短かに挨拶すると、サムソンの返答も聞かずに、そそくさと遺跡の坑内に向かって歩き出した。

遺跡とは言っても、遙か昔からの伝承によって、それが『遺跡である』と伝えられているだけで、実際に存在するのはただの岩山に過ぎない。

岩山の麓にはドーム上の大洞窟が掘られていたが、その中には取り立てて注目すべき物が存在する訳でもない。

それでも、ドーレスは予定していたスケジュールに則って、淡々と洞窟の壁面にランプの灯りを照らしながら、遺跡の謎を解明するのに役立ちそうな痕跡を根気良く探していた。

傍らのサムソンは、最初はドーレスの遺跡探索の様子を興味深げに見つめていたが、そのうちにただ後を付いているだけではいかにも手持ち無沙汰で、是非尊敬するドーレス博士の研究の役に立ちたいと言う意思をアピールする。

「あの、何か私に出来る事があれば何でもおっしゃって下さい」

サムソンが三回目に切り出した時、それまで無言のまま遺跡の探索に集中していたドーレスが、徐々に傍らのサムソンに視線を向けた。

「済まないが、少し黙っていてももらえませんか？ 調査に集中できないので……」

丁重ではあったが、慇懃な声の響きを込めてきっぱりと言い切るドーレスの口調に、サムソンは少々落胆したと言う風に俯いたまま、貝の様に口を閉ざしてしまった。

——ふう、これで少しは仕事に集中出来る。

何の恨みもないばかりか、尊敬の念を表明してくれているサムソンに対して、少し可哀想な気はしたが、ドーレスが抱えた仕事を着実にこなす為には、周囲の余計な干渉を退ける必要があった為、敢えて心を鬼にして自分の目の前にある作業に集中した。

ドーレスに与えられた時間は今日一日しかない。

その間に、遺跡の謎を解き明かす様な……少なくとも、更なる遺跡の探索が必要と周囲を説得出来るだけの、明確な証拠を見つけなくてはならないのだ。

後でサムソンには謝罪しなくてはならないだろうが、ともかく今は黙って好きな様にや

らせて欲しい……それが今のドーレスのサムソンに対する唯一の要望であった。

傍らで沈黙を続けたまま肩を落としたサムソンが見守る中、ドーレスは遺跡探索の作業を三時間程継続したが、洞窟の壁面からは何ら不審な痕跡は発見できなかった。

敢えて、どこかに異常がある……と言えば、洞窟の床面の一部だけ、少々材質の異なる石が埋め込まれている……部分だけだった。

その石がどの様にして埋め込まれたのか分からない程、周囲の岩と寸分の間隙もなく埋め込まれており、遙か昔にその地層に取り込まれたまま、時を経て一体化してしまったとしか見られなかった。

当然、周囲にその岩を動かす仕掛けとなりそうな物がある筈もない。

「いっその事、爆薬でも使用して破壊してみるか……」

ドーレスが腕を組んだまま冗談交じりに呟いた時、傍らのサムソンが血相を変えて咄め立てる。

「そんな事したら、私もあなたも即不敬罪で拘束されてしまいます！」

涙目で必死に止めようとするサムソンを尻目に、ドーレスは半ば冗談で口に出した自分のアイデアが、現在置かれた様々な状況を勘案するうちに、実は意外と良いアイデアではないかと思えてくる。

しかし、この若く可哀想な修道士の人生の希望を、この様な意外な形で奪い取ってしまう事に、一抹の同情と哀れを感じ、取り敢えず爆破案は保留とした。

そして、気分一新と今後の調査方針を再検討する為、また体が燃料補給の必要を訴えていた事もあって、ちょうどいい頃合いと一旦昼食を取る事にした。

「まさか、本当に爆破するなんて言いませんよね？」

自分の尊敬する博士の気分を損ねてはならないと、サムソンは精一杯の丁重さを表現しつつも、教会の修道士であると言う自分の立場から、言わねばならない事を極めて控えめに尋ねる。

ドーレスもサムソンに対して他意はなかったが、つい目の前の若き修道士に視線を向けると、その気がなくても意地悪を言って困らせてやりたくなる。

「そうだな、他にあの石を取り除く方法があれば。しかし、方法がなければ、爆破するよりないだろう」

もちろんドーレスにも遺跡の爆破など不可能な事は重々承知の上だし、下手に貴重な遺跡を爆破して、返って遺跡の謎を解き明かす僅かな痕跡が破壊されてしまえば、それこそ本末転倒と言うに等しい。

しかし、遺跡の内部に広がる洞窟の内壁に沿って調査しても、例の床の石くらいしか目立った異常が見受けられなかったのだから、まずあの石を何とかするより方法はあるまい。

このまま遺跡の謎に迫る証拠が発見出来なければ、二度と再び遺跡の調査を実施するチャンスは失われてしまう。

そんな事をぼんやりと考えながら、機械的に昼食を胃の中に詰め込んでいると、目の前のサムソンがふと口を開いた。

「そう言えば……、ドーレスさん、もしかしたらあの石は動かせるかもしれません……」  
朝方の様子とは打って変わって、すっかり意気消沈してぼそぼそと呟いた言葉を、ドーレスは聞き逃さなかった。

「それはどういう事ですか？ サムソン」

「いえ……、博士に付き添って、遺跡の内部を見ているうちにふと感じたんですけど、何だかあの遺跡って、『エルダ記』の第一の門のある回廊の記述に良く似ているな……と、何となく思ったものですから」

「『エルダ記』の第一の門のある回廊……？」

サムソンの言う言葉の意味が分からない……と言う風に、ドーレスが眉を顰めて首を振ると、サムソンは一瞬『しまった！』と慌てた表情を浮かべて口元を掌で覆ったが、既に手遅れだった。

「『エルダ記』とは一体何だね？ この遺跡とどの様な関係があると……」

「も、申し訳ありません。今のは聞かなかった事にしてもらえませんか？ 大主教との約束を違える訳にはいきませんので……」

「サムソン、あなたは一体何を隠しているのですか？ しかも、ハイマン大主教も関係があるようだが……」

「い、いえ……」

「では、これから直接大主教に『君が故意に遺跡調査を妨害している』とでも申し立てましょうか？ もしくは、『エルダ記』について直接大主教を問い質すという手もありますね」

「そんな事をされては、私が博士に『エルダ記』の内容を漏らしてしまった事が発覚して、私は教会を破門されてしまいます」

「では、『エルダ記』について話してもらえるのですか？」

「……わかりました。ですが、一つだけ約束して下さい。私がこれから話す内容を絶対に口外しないで下さい」

「いいでしょう」

ドーレスの返事に、サムソンは大きく深呼吸をして一旦気持ちを落ち着かせると、真っ直ぐドーレスの目を見据えておもむろに話し始めた。

最初は嫌がっていたサムソンにしても、尊敬するドーレス博士に素気無くあしらわれるよりは、少しでも博士の役に立ってまともに向かい合っていた欲しかったのだ。

「私も、『エルダ記』を一般の方がご存知ではないのをすっかり度忘れしておりまして……博士に一般の人というのも妙な気分ですけど。ところで、『天空の書』には、幾人かの人物を主人公とした寓話形式の物語が描かれている……と言うのは当然ご存知と思いますが、実は『エルダ記』も『天空の書』に綴られた物語の一つなのです」

『天空の書』とは、いわば教会唯一の経典であり、我々をこの世界に生ませた神々の物語が記された、一種の物語集である。

『天空の書』は、この惑星マルスに生存する全ての人間が、最低一度は全文を通読する

と言われる程の不朽のベストセラーであり、内容の如何は別にしても書名を知らぬ者は皆無とされる書であった。

もちろん、ドーレスも幼い頃から何度となく『天空の書』を通読し、またドーレスの専門分野とも浅からぬ繋がりを持っていて、『天空の書』の記述はある程度頭の中に入っていると自負していた。

しかし、そんなドーレスにとっても、『エルダ記』という物語が『天空の書』に含まれているという話は初耳だった。

いや、何度となく読み返した記憶を辿っても、『天空の書』で『エルダ記』なる物語を読んだ覚えはない。

「私も『天空の書』には幼い頃から慣れ親しんでいるが、『エルダ記』などという物語は……」

「ええ、現在刊行されている『天空の書』には記されておられません。しかし、遙か昔には、『エルダ記』も『天空の書』の一部として綴られておりました。それが、今から二百四十年前に世間を騒がせた『大主教不敬事件』の煽りを受けまして、不要な誤解を招くとの理由により『天空の書』から削除され、以降『エルダ記』の存在は、『天空の書』からも教会からも永久に抹殺されてしまったのです」

ドーレスが始めて耳にする話に、にわかには内容の真偽を図りかねたが、遺跡の探索とは別にしても、ドーレスにとってはとても興味深い話ではあった。

「うーむ……。しかし、抹殺とは穏やかではないな。確かに『大主教不敬事件』は教会としては二度と触れたがらない程の歴史的な大スキャンダルだろうが、それと『エルダ記』との間にどの様な関係が？」

「『エルダ記』の主人公エルダとは、生きながらにして神の国を訪れ、再びこの世界に戻って来たと称している人物です。そして、『エルダ記』には、エルダが神の国を訪れる際に実際に辿った軌跡が、詳細に語られているのだと言われております。そして、『エルダ記』にある神の国へ至る道の入り口は、無明の洞窟と言う場所から始まるのですが、『エルダ記』には肝心の無明の洞窟がどこにあるのか、そしてどのようにして行けば良いのかが記されていなかったのです。ですから、『エルダ記』は長年に渡って寓話の類いだと思われてきたのですが……」

「しかし、その『エルダ記』とやらは単なる寓話なんかではなくて、エルダが実際に神の国へ至る経路を綴った記録だった……という訳か？」

ええ……とサムソンは頷いて、更に話を続ける。

「そういう疑いを持った人物が、過去に二人います。『大主教不敬事件』の主演であり、今となっては不敬なる魔の使いとされてしまったゲオルグ大主教と、もう一人が一介の修道士であるサムソン……つまり私の事です」

「なるほど、それが事実であれば驚くべき事態だ。教会がひた隠しにしたい理由も分からなくはないし、そうであれば二百四十年も昔の事件の記憶が残らず消え去っていたと仮定しても、筋が通らない訳じゃない。しかし、サムソン、あなたは何故？」

「私は元々教会の記録院で、いにしえから伝わる貴重な書物の管理に携わっておりまして、日常業務として古書籍に触れているのです。その日も業務として古書籍の維持に関する作業をしておりまして、偶然にも『大主教不敬事件』以前に刊行された『天空の書』を発見してしまったのです。私はご覧の様に好奇心だけは人一倍旺盛な方ですから、直ぐに『エルダ記』にのめり込んでしまいました。それからしばらくして、私が古書籍の中から問題の『天空の書』を抜き出して密かに保管し、『エルダ記』を読み進めている事が、教会側に発覚してしまったのです。しかし、私にとっては実に幸いな事に、記録院の館長から直接大主教に事実が知らされたので、事が公けにはなりません。本来ならば教会を破門の上、不敬罪で牢に繋がれても文句は言えない状態でしたが、大主教の特別のお計らいによって、私の罪は不問に付されたのであります。その上で、いにしえの『天空の書』とその中に綴られる『エルダ記』の存在は、私と、記録院の館長、そして大主教の三人によって秘匿される事になったのです。大主教は、私の罪を不問に付すに当たって、ある条件を提示されました。極秘裏に『エルダ記』の研究を進める事、その事実を誰にも知られぬ様計らう事、研究の成果については随時大主教に報告する事。私はその条件を守って、これまで極秘裏に『エルダ記』の研究を続けて来たのです。そして今回、かの高名な尊敬するドーレス博士のお供に、私の様な者を選んでいただくなど、大主教には幾ら感謝を捧げても足りないくらいです。しかし、私は偶然の成り行きから『エルダ記』の内容を博士に話してしまいました。この先私を待ち受けている運命を思うと……」

半ば恍惚とした表情のまま一気に捲し立てたサムソンが、最後には憔悴し切って思わず言葉を詰まらせた僅かな隙を見逃さずに、ドーレスは手短かに言葉を返す。

「それはどうだろうか？ もしかすると、大主教は遺跡と『エルダ記』の関係を既に知っていたのかもしれない。少なくとも、疑念は抱いていたのではないか？ それから、あなたは今、『エルダ記』が単なる寓話ではないと疑いを持った人物が二名いると言ったが、それは間違いだろう」

「それはどういう事です？」

「あなたが言った二名以外に、ハイマン大主教が加わる事はほぼ間違いのないと思える。そしておそらく、実際に『エルダ記』そのものを見た上で……という条件付きではあるが、私もその中に加わるかもしれない」

「何ですって！」

「ハイマン大主教と言えば、惑星マルスに生きる一千万市民の中で、最も教会と『天空の書』に関する知識に精通されている方なのだ。或いはサムソンが『エルダ記』の存在を知る前に、既にその存在を知っていたとしても不思議ではあるまい。存在だけではなく、『エルダ記』の存在が教会にどの様な影響をもたらすか、その重要性和危険性を共に熟知していたのかもしれない。その上で、世間に対しては存在を秘匿する必要性を認識しつつも、同時に『エルダ記』の研究を進める必要もあると判断されたのだろう。縁あってサムソン、あなたが大主教の意を受けて『エルダ記』の研究を代行する事になった。そして、今回あなたが私の付添い人として遺跡探索に同行する事になった理由も、『エルダ記』に

関するあなたの知識が必要になるのだと、大主教が予め想定した上で決定されたのだとしたら？」

\*

「それで、神の国への入り口について、『エルダ記』には何と記されているのか、この目で確認したいのですが……」

「それが、大主教直々のお達しで、『エルダ記』が収録された『天空の書』は門外不出であるとして、記録院の書庫から持ち出す事は許されていないのです。それに、例え相手がドーレス博士であったとしても、教会に所属している訳でもない人物に『エルダ記』を直接閲覧させる事が、果たして許されるかどうか……」

「そうは言っても、今は非常事態なのだし、又ハイマン大主教がある程度理解を示してくれる様であれば、その辺りは機転を利かせて柔軟に対応してもらえるのではないか？」

「確かに、博士のお話を伺う限りでは、大主教のお許しが得られる可能性はあるでしょうが、何しろ私は一介の修道士に過ぎません。ですから、どうしてもとおっしゃるのでしたら、ドーレス博士がご自分で直接大主教と交渉なさって下さい」

「交渉などと悠長な手続きを踏んでいる余裕はないのだが……」

「その様な事を私に言われても困ります。それに、若干正確性には欠けるかもしれませんが、私も『エルダ記』の最初の方だけならば、ほぼ暗記しておりますから」

「最初の方か……。では、まずそれを聞かせてもらえないか？」

「はい。では、最初の無明の洞窟の件ですが、エルダはこう申しております。『無明の洞窟は、一見地の底の黄泉路に直結している様に感じられるかもしれない。何故なら、唯一の通路が直接地の底へ向かって果てしなく伸びているからだ。しかし、この惑星マルスがどれだけ巨大であろうと有限の存在である以上、地の底へ向かって果てしなく延びる通路などある筈がない。そして、やはりこの通路も『一体どこまで伸びているのか？』と不安を感じ始める辺りになって、やっと出口に到達する。さて、この通路は選ばれた時に選ばれた者のみが通過を許される様に予め仕組まれている。きっと、選ばれざる者には通路の存在も、通路の前に立ちはだかる門の存在にも気付かないだろう。選ばれた者には、神々の国へ通ずる門が開くに相応しい時が分かる筈だ。選ばれた時に、門に向かって神の忠実なる徒である証を示せ。神はその者に祝福を与え、対面のチャンスを与える為にその門を開くだろう』とあります」

「なるほど。ポイントとなるのは、第一の門を開けるには時と場所を選ばなければならない事。門を開ける鍵が必要と言う事だな」

「恐らく、神の忠実なる徒の証とは、教会のシンボルでもあるトリグラム（神と教会と人々の三者の関係を象徴的に表現した三角形）の紋章を示しているのでしょうか。しかし、神の国へ通ずる門が開かれるに相応しい時というのが分かりません」

「そうですか？ その答えは『天空の書』そのものに記されていると思うが……」

「と、言いますと？」

「『天空の書』によれば、神はどこからこのマルスの地を訪れたと記してあるのか、修道士であるあなたなら良くご存知の筈」

「天空より現れたる……ですか？」

「そこで天に注目しますが、天にある物の中で神を象徴する存在として最も相応しいのは、やはり全ての生命を育むエネルギーの源とされている太陽でしょう。太陽光なくして生存を許される生命はそう多くはありません」

「しかし、それが神の門を開けるに相応しい時と、一体どの様な関係が？」

「太陽を神の象徴と考えた場合、太陽にとって最も相応しい場所は、天の高みに登り詰めた位置ではないでしょうか。つまり、太陽が天の高みに登り詰める時は、一年に一度だけ訪れる……」

「夏至……ですか？」

「恐らく、夏至の昼時なのでしょう」

「でしたら、幸いにも夏至は間近に迫っておりますが、それでも若干待たされる事になりますね」

「その時でなくては開かないと言うなら、待つ他はありません。もちろん、夏至の日に再調査出来る様に教会と折衝しなくてはなりませんし、それまでの間にも出来る限りの下調べをするなど、考えられるあらゆる手段を講じて、精一杯足掻いて見ますがね。第一の門についてはそれで良いでしょう。では、『エルダ記』によると、その続きはどうなっているのですか？」

「はい。第一の門を抜けると、大地の底へ向かって一本の細い洞穴が一直線に伸びておりますが、洞穴の突き当たりに第二の門が立ちはだかります。『エルダ記』によると、“第二の門が立ちはだかる場所、それは地の底遥かな深みにあるが故に、全ての命の源泉である太陽の光も一切届かない。それ故、その場所は既に神の領分とは見做されない。遥か低き大地の底を統べるに相応しき者の証を掲げよ。門はその地を統べるに相応しき主の手によって開かれるだろう。” ……とあります」

「大地の主か……『天空の書』にも、いにしへの伝説にも大地を統べる者に関する記述はないが、考えられるとすれば、冥府の守護者ハデスの事だろうか……。しかし、ハデスはこの世に存在する全ての悪を束ねるとも言われている。その様な存在が神の国へ至る通路に関係があるとは、少々考え辛いのだが……」

「その点については、『エルダ記』に次の様な記述がございます。“神の国へ至る門の守護者が、大地を統べる者である事に戸惑いを覚える者もあるだろう。しかし、神は全てを生まれ、育ててきた大元であるのだから、人々の理解の遥か高みより『そうあるべき』と全てを見通した上で、絶妙なバランスの元に全てが定められていると言う事を忘れてはならぬ。故に、人の刹那的な価値観に惑わされる事なく、神の言葉と、それに常に忠実であったが故に神の国への参内を許された私の言葉に、耳を傾けて欲しいのだ”。つまり、『ハデスは忌むべき者』とは現世的な感覚なのです。ハデスが遥かな地の底で神の御用を

していないとは誰も言えないのです」

「なるほど。同感だ。ならば、第二の門を開ける為の証は、ハデスの紋章である可能性が高いと言う事だな？」

「恐らく……」

「それでは、その先はどうなっているのかね？」

「はい。第二の門を抜けると、今度はどこまでも先が見えない、どこまで続くのかと驚く程横に長く伸びる通路が続きます。通路とは言っても、どちらかと言えばホール状の広い洞穴が無限に続いている……といった方が正しいのでしょうか。その通路を延々で行った突き当りに一つの小部屋があり、その小部屋の中に第三の門があります」

「第三の門か……。一体神の国へ至るには幾つの門を潜り抜けなければならないのだ？」

「『エルダ記』によれば……。確か五つの門があったと思います。ただ、私が概要を暗記しているのはここまででして、その先は二～三度目を通した事がある……と言った程度でしかありませんので……」

「内容が分からないと言うのか？」

「いえ。ただ、大雑把な内容しかお話出来ませんし、内容の正確度についても自信がありません」

「まあ、それでも良いから、今分かるだけは取り合えず話して貰えないだろうか？」

「では、第三の門についてですが、『エルダ記』によれば、何らかの機械的なからくりが施してあるらしく、そのからくりを扱うには高度な専門的知識が必要だとの事です」

「つまり、機械を扱う技師が必要と言う事か？」

「ええ、恐らく。でも、機械に対する高度な知識があったとは思えないエルダが操作しただけでも、神の国に関する様々な知識が披露されたのだそうです」

「と言う事は、そこまで行けば、神の国の概要とか、或いは神々の知恵の一端に触れる事が出来るかも知れぬ……そう考えてよいのだろう。だとすれば、今我々が直面している危機に対処する為に有効な知識と技を、そのからくりから手に入れられる可能性がある……と言う事か。そして、その先は？」

「要はその機械仕掛けのからくりで第三の門を超える仕組みがある様なのですが、そこからいよいよ、神の国へ赴く長い旅が始まるのだそうです。それは言わばゴンドラのような乗り物に身を委ね、無限の空へ向かって駆け上る風の様でもあり、また遥かなる大海を当て所もなく漂う一隻の小さな小舟の如し……。そして、旅路の果てに差し掛かる辺りで、神の国と外界とを隔てる第四の門があります。第四の門はゴンドラと共に通り抜ける為、ゴンドラの方が優れていれば恐れるに足りませんが、そこへ至る長い旅路の間にどの様な事態に見舞われるか予想が付きません。ですから、場合によっては第四の門の通過に支障の出る場合があるのだそうです。無事に第四の門を抜けると、程なく第五の門、最後の壁が立ち上がるのみとなっております。しかし、『エルダ記』には、第五の門の詳細については語られておりません」

「なるほど。『エルダ記』の内容については大体分かりました。それでは、いずれにし

ても第三の門を抜ける為に、機械の扱いに慣れた者を随行させなくてはならないし、それ以前に第一の門を開けるには夏至まで待たなくてはならない。それに、『エルダ記』によれば、神の国への道程はかなり長い時を必要とする様だから、それなりの装備も整えておかななくてはなるまい。出来れば、夏至の日までに一度、本物の『エルダ記』をこの目で確認しておきたいのだがな」

「ですから、そればかりはご勘弁下さい。今こうしてドーレス博士に『エルダ記』の内容をお話しているだけでも、私にとっては決死の覚悟なのですから……」

「しかし、それでは、遺跡調査をもう一度要請する理由の説明が付かない。サムソン君には申し訳ないが、やはりこの件はハイマン大主教と、最高評議会議長に説明しない訳には行かないだろう」

「そ、そんな……」

「大丈夫……と保証する訳には行かないが、君には危害の及ばない様に最大限の配慮を払う様、約束しよう」

「しかし、本当に大丈夫なのでしょうか？」

「そう信じたいが……。いにしへの『天空の書』と『エルダ記』の存在は、教会にとっても大変危険な存在だとは思わないかね？ もし『エルダ記』の存在が世間に知れ渡ったら、一体教会はどうなってしまうだろうか……」

「それはもう、きっと、かつての『大主教不敬事件』を凌ぐ大事件になるかもしれません」

「だからこそ、教会に我々の要求を飲ませる際も存在するのだよ。まあ、後は全て私がハイマン大主教と直接交渉するから、出来れば君も夏至の日の本番に向けて、色々と準備を手伝っていただきたい」

「それは、ドーレス博士のお手伝い出来るのは喜ばしい事ですから、私に出来る事でしたらなんなりと。ですが、余り無茶な指示だけはご勘弁下さい」

「ははっ。私はそれほど意地の悪い人間ではないよ。この際だから今日出来る所まで遺跡調査を進めたいのだが、その手伝いをよろしく頼むよ」

「はい、それでしたら喜んで」

\*

『エルダ記』の記述にある通り、大ホールを何十、何百も直線状に繋げた位の長さがある広大な通路の果てには、見るからに厚く頑丈そうな壁を隔てて小さな部屋があった。

小さいとは言っても、それは直前まで通り抜けてきた通路と比べた場合の表現であって、単純に部屋単体としてみれば、かなりゆったりとした造りの部屋である。

歴史学者ドーレス、修道士サムソン、機械技師タルカンの一行は、その部屋に至るまでの数々の工程で、既に散々驚かされていたのだが、この部屋に整然と並んでいる、見た目は単なる机としか思えない”機械仕掛けのからくり”の正体に首を捻っていた。

「サムソン……本当にこのただの机の様な物が、『エルダ記』にある“機械仕掛けのからくり”なのですか？」

ドーレスの問いかけは、その場に居合わせた三人の思いを象徴していた。

もちろん、名指されたサムソン当人も例外ではない。

「……多分、そうだと思うのですが、どうですか？ タルカンさん」

職業柄か、いち早く眼前の机を物色し始めたタルカン技師にサムソンが話を振るが、技師はその言葉には答えずに、既に目前の新たな玩具の仕組みを解明する事に全神経を集中していた。

「あ、サムソン。たいまつ灯火をもう少し机に近づけて……。うーん……。それでいい」

僅かなたいまつ灯火だけを頼りに、かつて見た事も触れた事もない機械と格闘するのは、いかに熟練工のタルカンとしても容易な作業ではなかったが、技師として惑星マルス随一との呼び声も高い者としては、初めて触れる未知の機械ほど興味深い対象はなかった。

タルカンがしばらく自分一人の世界に没入し、未知の機械と戯れている様子を、ドーレスとサムソンはなす術もなく息を呑んで見守っている。

幾らタルカンの技師としての評判が高いといっても、神の手による機械の扱いは、少々荷が重過ぎるのだろうか。

それとも、『エルダ記』が書かれた時代から、既に相当の年月が経過しているだろうから、その間に何らかのトラブルに巻き込まれて故障してしまったのだろうか。

さすがにそろそろ限界か……と、傍観する二人が諦めかけて次の方策を考えねばと思い始めた頃、どう見てもただの机としか思えない物体が、微かに低い唸り声を上げた。

次いで、これまではただの石か金属だと思っていた机の表面に、ランプの灯火の様な光が点り、正面の何もなかったと思っていた石の壁にも、ぼんやりと灯火が浮かび上がった。

よくよく見ると、文字らしき記号の羅列が壁面にうっすらと浮かび上がっている。

「何なんだ、これは……」

その場にいる誰もが一様に目を丸くする中、技師のタルカンだけは黙々と眼前の机と格闘している。

——そのまましばらくタルカンが机を物色しているうちに、いつの間にか壁面の表示が別の物に切り替わっていた。

「タルカンさん、何だか壁の表示が切り替わったようなんだが……」

「ああ。どうやら、机の上の光っている部分があるだろう？ そこを指でこうやって撫でると、壁の表示が切り替わるみたいなんだ。どういう仕組みでこんな奇術の様な真似が出来るとかまでは分らんがね」

そうやってタルカンが机の上を指で撫でると、確かに壁の表示がそれに応じて立て続けに切り替わっていった。

しかし、当のタルカンにも、そのからくりや正式な操作方法まで理解できた訳ではない。

「サムソン、この奇妙な機械らしき物について、『エルダ記』に詳しい事は書いてない

のですか？」

「『エルダ記』はあくまでエルダの体験記ですから、機械技師でもないエルダが、この機械の詳細な知識を語ってくれる筈がありません。でも、エルダにも操作自体は出来たようですから、それ程難しくはなかったのではないのでしょうか？」

「しかし、その様な憶測を言われても……」

ドーレスとサムソンの無責任なやり取りが続く中、技師のタルカンは少々ムツとした表情を見せたが、それでも黙々と眼前の機械を弄り回している。

今、机の上には四角状に輝く四つの光がぼんやりと浮かび上がっている。

そのうちの三つは黒枠に囲まれた白色光で、ほぼ中央付近を横に並び、残りの一つだけがやや右下の位置で、ポツンと緑色の光を帯びていた。

タルカンはこれまで、机の上を闇雲になぞっているだけだったが、何気なく右下の緑色の光の上を叩いてみると、目の前の壁の表示が一旦消え去り、しばししてから壁が明滅したと思った矢先に、今度はまるで生き物が中に入っている様な動く映像が映し出された。

その場にいた三人は、思わず息を呑んで壁に表示される絵に魅入られ、動く絵が表示される仕組みについての憶測を巡らせていたが、やがて映像の内容そのものに強く惹き込まれていった。

壁に映し出されていたのは、一面の青い空だった。

空と緑の大地が天地を二分し、大地には様々な種類の生命に満ち溢れていた。

たった一つの細胞の様な原始生命から、幾千万の時を隔てるうちに鮮やかな色の花びらを湛え、競う様に自らの華やかさ・煌びやかさを誇っている植物に、地上の生物の中で最も複雑かつ力強い大型獣達。

そして、その映像の中にも人類が存在していた。

映像の中の人類は、名実共に地上に溢れ返る様々な生命の勝者として君臨し、この世のあらゆる栄耀栄華を欲しいままにしていた。

しかし、自らの分を弁えずに驕り高ぶる人類の地上天国は程なく潰え去り、人が自らの過ちの結果を甘受するべき時が訪れた。

人類が日常生活における利便性を向上させる為に、この世に作り上げて来たあらゆる物が、長い時間をかけて世界の自然環境に負荷を掛け続けた結果、とうとう人の生存を許さない環境へと変異する為の引き金を自ら引いてしまったのだ。

人類は、事態がかなり進行し、表面化してから、慌てて幾つもの対応策を講じたが、その様な間に合わせの弥縫策が有効に作用する筈もなく、刻一刻と事態は悪化の一途を辿った。

そして、最後に人類は自分達を生み出した母なる惑星を捨て、果てしなき空の彼方に浮かぶ未知の惑星に活路を求めた。

人類が再起を賭けて移り住んだ星の名を『惑星マルス』と言った。

そして、彼らを生み出した母なる星であり、彼らが良い様に弄び、散々汚した末に捨て去った星の名を『惑星アース』と言った。

惑星マルスは、かつては人の住むには適した環境ではなかったが、彼らがマルスに手を加えて人の住むに適した環境に改造した為、マルスは人を始めとした生命の樂園へと姿を変えた。

惑星アースの環境激変によって、既に多くの人々の命が失われていたが、残された僅かな人々は自らの手で作り上げた新たなる樂園『惑星マルス』へ移住した。

僅かに残された生物種としての人類の遺伝子を後世に伝える為に、そして、母なる惑星アースが大自然の神秘的な自己治癒能力によって、再び生命の息吹溢れる元の姿を取り戻すのを待つ為に。

かくして、かつて惑星アースの住民であった人類は、惑星マルスの一員となった。

惑星マルスに降り立ち、その地に根を張った人々は、かつて惑星アースを荒廃に導いてしまった、自らの驚嘆すべき様々な技術を封印し、自らが作り上げたマルスの自然に抱かれて生きる道を選択した。

かつてと同じ過ちを繰り返さぬ為、そして、自分達の遠い子孫が再び母なる大地に戻る時が訪れるまで、この大地に命を繋ぎ止める為である。

しかし、何らかの突発的な理由により、封印した技術が再び必要となった時に備えて、驚嘆すべき技術の存在を後の世に知らせ、封印を解く為の鍵を何らかの形で残しておく事も忘れなかった。

もちろん、その技術は最終的に惑星アースがかつての姿を取り戻した時に、惑星マルスから母なる星へ帰還する用途でも用いられる事は言うまでもない。

どうやら、かつて封印された技術を復活させる鍵の役割を果たすのが、この奇妙な機械の正体らしい。

そして、現在壁面に映し出されている映像の語る内容がすべて事実だとすると、現在マルス星にすむ我々の祖先は、かつてアース星を後にしてこの土地に降り立った人々……つまり、『天空の書』に記された神々は我々の遙かな祖先と言う結論に至る。

しかも、これまで我々が神として崇めていた祖先の正体が、実はかつて生命の息吹溢れる惑星を一つ滅亡の際に導き、更には自らが生き延びる為に母なる大地を捨ててこの地に降り立った、神とはかけ離れた逃亡者という事になる。

そして、彼らの時代から五千年を隔てた子孫が今、第二の故郷とも言える惑星マルスまでもを滅亡に導こうとしているのだ。

我々は、目の前で目まぐるしく展開する、常識を遥かに抜き越えた驚愕の映像の数々に、言葉を失ったまま呆然と立ち尽くしていた。

もちろん、この映像は何らかの穏やかならざる目的の為に作られた、全く根拠のない偽りの光景でないとは誰も断言出来なかったが、少なくとも壁面に繰り広げられる映像の数々は、事実の正確な記録であるかの様なリアリティがこもっていた。

だとすれば、我々は今まさに先祖と同様の過ちを犯している事にはならないだろうか？

我々が神の業として望みを繋げて来た先祖の驚嘆すべき技術は、かつて惑星アースを死に至らしめた原因そのものなのだ。

封印を妄りに解き放てば、逆に衰えつつあるマルスの息の根を止めてしまいかねない。ただし、この映像が事実であれば、僅かながら救われる可能性が残されている事も見て取れた。

かつて惑星マルスに降り立った我々の先祖は、自ら荒廃させた惑星アースが、神秘的な自己治癒能力を発揮させて、いずれ再び生命の生存可能な環境に復活する可能性を信じていた。

その時に備えて、再び惑星アースへ戻る為の技術も残されていると言うのだ。

『天空の書』を始め、これまでに残されてきた伝説や歴史的書物によれば、我々の先祖が惑星に降り立ってから五千年程が経過する。

もし、その間に惑星アースが再び人類の生存に適した環境を取り戻していたとしたら、我々はかつての先祖が捨て去った母なる星に新たな活路を見出す事で、生き延びる事が出来るのかもしれない。

そして、この部屋の先には、我々が惑星アースへ向かう為の仕掛けが施されている……と思われた。

「皆さんが今この目で見た様に、この映像が事実であれば、我々には惑星アースへ向かうという選択肢が残されている」

「しかし、『エルダ記』には、“第三の門を越えて第四の門を目指す者は、再び後戻りする事は許されない”と記されております。つまり、この先へ進むにはそれなりの覚悟と決断が必要だと言う事です。私達はいわば未知の世界へ新たな一歩を踏み出そうとしているのですから、あらゆる可能性を慎重に考えた上で決定するべきです」

「では、サムソンはこの先へ進むべきではないと言うのか？」

「いえ。私はむしろ、『エルダ記』の記述の信憑性を誰よりも肌で確認しているのですから、是非この先へ進んでみたいのです」

「しかし、自分の好奇心だけで安易に選択すべきではないと？」

「そうです」

ドーレスとサムソンの間に挟まって、技師のタルカンが低く呟いた。

「どうやらこの光の部分が、その門とやらを開ける鍵になっていると思うのだが……」

「おお、そうですか。では、後は我々の意見の一致を見るだけという事ですね。幸いにも、私は今回の探索に関して、最高評議会より全権を一任されています。だから、私が全てを決定しても良いのですが、ここは一同の意見を再確認しておきたいと思います。このまま第三の門を抜けて先へ進むべきという者は挙手をお願いします」

静かに告げるドーレスの声に響いて、サムソンとタルカンの右手がゆっくりと天上に向かって突き上げられる。

一拍置いて、ドーレスも静かに右手を上げた。

「わかりました。全会一致で決定ですね」

\*

第三の門を越えると、その先には細長い通路が一直線に続いていた。

しばらく道なりに歩いて、やがて三人が通路の突き当たりに差し掛かると、一見行き止まりに思われた壁が音もなくスライドして、その先には六脚の頑丈そうな椅子に埋め尽くされた小部屋があった。

「ここは、『エルダ記』にあるゴンドラではないでしょうか。いかにも……と言った雰囲気の良い部屋ですから」

「通路がいきなりゴンドラに繋がっていると言うのか？」

「まあ、ここで立つていてもどうしようもないから、取り合えず中に入ってみましょう」

ドーレスの言葉に促されて、三人が思い思いのシートに腰を下ろすと、いきなり狭い室内に小さな灯りが点った。

「これは一体……」

ドーレスが呟く間もなく、今度は聞き覚えのない何者かの声が、様々な機器に埋め尽くされた狭い室内に響き渡った。

「皆様、ようこそいらっしゃいました。当機は予めプログラムされたスケジュールに則り、皆様を惑星アースまでの快適なクルーズにご案内致します。機内の安全確保の為、離着陸時はシートベルトの着用をお願いしております。皆様、お好きなシートにご着席下さい」

声が収まると同時に、三人の腰掛けていた椅子から幅広の頑丈な紐が伸び、瞬く間に各々の体を拘束していた。

「これは一体……」

反射的に背後の扉を振り返ったドーレスの視界には、勝手に閉じようとしている扉が映った。

訳が分からないうちに拘束され、この狭苦しい室内に隔離されてしまったのだ。

狭く薄暗い室内に取り残された三人全員が、自分をきつく締め付ける紐を外そうと無駄な抵抗を試みるが、時既に遅しと言った所だ。

——後戻りが利かないとはこの事だったのか……。

ドーレスを始めとした誰もが、先程サムソンの発した警告の意味を身をもって認識したが、それこそ今更後戻りする訳には行かないのだ。

こうして身動きが取れない様に拘束されて、始めて密かな後悔の念がジワジワと首を擡げたが、こうなっては最早先へ進むしか道は残されていないのだ。

後は、我々の先祖が掛けた僅かな望みが叶って、惑星アースが再び生命の息吹溢れる星として蘇っている可能性に期待するしかない。

そんな三人の不安に満ちた心の内を知ってか知らずか、機械仕掛けのゴンドラは次第に細かな振動と不気味な騒音に包まれてゆく。

「皆様、大変長らくお待たせいたしました。当機はこれより離陸体制に入ります。離陸

後九十秒間は不定期の振動に覆われる可能性があります、通常航行における想定されたプロセスですので、どうかご安心下さい。それでは、よい旅を……」

声が告げ終わると、ゴンドラの騒音と振動は益々激しくなると共に、少しずつ体が浮き上がる様な不自然な感覚に襲われた。

「何だ、この奇妙な感覚は……」

「こんなに激しく揺れて……、まさかこのまま壊れるなんて事にはならないですよ」

こういった機械仕掛けの乗り物の扱いに慣れていない乗組員の思惑を他所に、淡々と神の国へ続く定められたルートを進むゴンドラは、順調に旅路の第一関門を潜り抜けた。

乗組員にとっては永遠とも思える九十秒間が過ぎると、これまでゴンドラを包み込んでいた振動と騒音が嘘の様に消えていった。

目の前の小さな窓越しには、緑の木々と赤茶けた大地が複雑に入り乱れた巨大な星が、真っ黒な深い海の中にぽっかりと半身を浮き上がらせている光景が写し出されていた。

「離陸プロセスは無事終了致しました。当機はこのまま惑星マルスを三周した後、惑星アースへ向かう巡航プロセスに入ります」

そう告げる声に、目の前に広がる巨大な星が自分達の住処であるとは、俄かには信じられなかったが、『そうなのだろうか……』と驚きと戸惑いの混じった複雑な表情を浮かべつつ、目の前の光景に心を奪われていた。

こうして空の上から覗き込む惑星マルスは意外とちっぽけで、あの星の表面に自分達が張り付いていたとは信じられない、少々複雑な心境だった。

乗組員のそれぞれが立場に応じた様々な思いを抱きつつ、なおも半身を太陽の光に覆われたマルスの姿に見とれていたが、ゴンドラはそんな乗組員の思いにはお構いなく、予め定められたスケジュールに従って、徐々にマルス星から遠ざかってゆく。

ゴンドラが向かう先は、一面を暗黒の闇に塗りつくされた空の深海だった。

その行く手には神の国……もしくは、わが先祖の故郷、かつてはこの世に稀なる美しい姿を誇っていた惑星アースが待ち受けているのか、それとも、砂と岩に覆われて始終暴風が吹き荒れる不毛の大地が待ち受けているのかは、誰にも見当が付かなかった。

ゴンドラの進む先には、惑星アースらしき物体は確認できなかつたし、仮に何かが見えたとしても、それが惑星アースだと見分ける術を誰も持ち合わせていなかった。

サムソンによれば、『エルダ記』には、第三の門を抜けてゴンドラに乗り、そのゴンドラが第四の門へ至るには途方もない時間がかかるとの記述があるそうだ。

遺跡の入り口からの工程を思い返せば、きっと何日も……事によっては何週間も、この狭く窮屈なゴンドラに閉じ込められたまま過ごさなくてはならないのだろうか。

それでも、予め何かしらの訓練を受けて、精神的にも肉体的にも極限状態に対応出来るよう鍛え上げられた人間であれば、まだしも耐えられる可能性がないとは言えないだろう。

しかし、乗組員はいずれも人並み外れた能力の持ち主とはお世辞にも言えなかつたし、何ら特別な訓練を受けた訳でもない。

ただ単に成り行きでこのゴンドラに迷い込んだも同然の彼らにとって、この突然の予想

だにしない展開には戸惑いを隠せなかった。

しかし、そんな乗組員の困惑を嘲笑うかの様に、突然ゴンドラの内部に声が鳴り響いた。

「当機は、現在秒速三百キロメートルの巡航速度で正常航行中です。終着点、惑星アースには七日後に到着の予定となっております」

——七日か。

半ば安心し、半ば戸惑いと言う所が、三人の偽らざる心境であった。

七日という期間を長いと取るか短いと取るかは、その時の状況にも個々の感覚にもよるが、とにかくこの狭いゴンドラから開放される期限の目安が明確になっただけでも、多少は心の重荷が取り除かれた気分だった。

一方、今回の探索で携帯できる物資の量は限られていた為、八日分の食料しか持参していない。

それでも、節約すれば片道分は問題ないだろうが、往復出来るかどうかはかなり微妙な状況になる。

いわば、神の国は絶対に存在すると言う前提で始めた、ある意味無謀とも言える旅ではあったが、事の機密性を確保するためには、大規模な搜索隊を組織する訳には行かなかったのだ。

こうなる可能性は予め想定していた。

仮にこの旅が失敗に終われば、我々とは多少時期がずれるにしても、いずれ惑星マルスに住む全ての住民が同じ運命を辿るのだ。

それから惑星アースへ至る約七日の道程の間、三人の乗組員は様々な不都合を抱えつつも、半ば開き直ってこの旅を出来るだけ楽しむ様に努めていた。

七日間とは言ったものの、この長く広大な暗黒の空間には日の出も日の入りもない為、余り正確とは言えない自分自身の感覚（空腹を感じたとか眠気が襲ったとか）を頼りに、大よその時間の経過を推測するしかなかった。

更に、片道七日間の道程を往復するにはとても持ちそうに無いと、食料を摂取する回数を減らした上に、一回当たりの量も抑制していたから、余計に普段の生活リズムからはかなりのズレが生じていた。

それでも幸いだったのは、ゴンドラの端にあった自動的に開く扉を隔てた先に、小さいながらも簡易トイレスペースが用意されていた事だった。

こういった生理現象だけは我慢する訳には行かなかったから、三人は劣悪な環境に悩まされる心配だけはないと、思わずホッと胸を撫で下ろしたのだった。

時間を経るに従って、次第にゴンドラの中での過ごし方にも慣れ、狭さと食料の不足を除けば、まあそこそこの生活がしばらく続いた後、三人の乗組員は、暗黒の中で唯一明るく輝いていた太陽の光が、いつの間にか目に見えて大きくなっている事に気づいた。

そして、太陽の光を浴びて鮮やかな青色に輝く一つの星……惑星アースの幻想的な姿は、まさに神の国というに相応しい荘厳な面を現していた。

惑星マルスの遺跡に隠された機械仕掛けの部屋で、不意に再生された動く絵に写されて

いた姿そのままの、美しい惑星アースの姿がそこにあった。

惑星アースは、遙か昔に人の手による環境破壊の犠牲によって、人類が生存するには適さない環境になってしまったと、あの動く絵は伝えていた。

しかし、目の前に浮かぶ青い星は、かつての生命の息吹に満ち溢れた生き物の樂園そのものに見えた。

「おお、あの美しい星が惑星アースなのでしょうか？」

「……」

「確かに美しい。これが神々の国のある星……かつて我々の先祖が滅亡に追い込んだ惑星とは、傍から見た限りではとても信じられない」

乗組員が三者三様の反応を示しつつ、目の前に広がる光景に眼を奪われる中、これまでの静寂を打ち破る様に、またしてもあの声がゴンドラの内部に響いた。

「皆様、大変お待たせいたしました。当機はまもなく、惑星アースへの着陸プロセスを開始致します。着陸に際しまして、安全確保の為にシートベルトの着用を義務付けておりますので、ご協力をよろしくお願い致します」

声が告げるなり、又しても座席から伸びた頑丈な紐が、乗組員の体を拘束する。

しかし、それは二回目の経験と言う事もあり、自分達に危害を加えるものではないと理解していたので、精神的には動揺も見せずに為されるがままに身を委ねていた。

とはいえ、やはり今回は神の国の間近へ接近するからだろうか……惑星マルスを離れた時と同じ様に、そう簡単に我々の侵入を受け入れてくれる訳ではなさそうだ。

「これより大気圏に突入致します。機体は振動と騒音に包まれますが、故障や事故ではありませんので、どうぞ落ち着いて到着をお待ちいただきますよう、お願いいたします」

それにしても、どこからともなく発せられてゴンドラの狭い室内に響き渡る声は、相変わらず当事者意識の極めて希薄な無表情な声で、能天気な発言を繰り返すばかりだが、今やゴンドラを覆っている振動は、今すぐにでも分解して粉々に飛び散ってしまうのではないかと、強い恐怖を抱かせる状態にまで悪化していた。

『エルダ記』によれば、惑星アース到着直前に第四の門があるのだと言う事だったから、今ゴンドラは第四の門を通過している最中に違いない。

ゴンドラの正面に嵌め込まれている小さな窓には、つい今し方まで幻想的な青い星の魅惑的な姿が映し出されていたが、今やただの壁の様に滑らかな薄暗い物体が立ちはだかっているだけだった。

きっと、この窓も惑星マルスの機械仕掛けの部屋にあった、一見ただの壁に見えるが動く写真を映し出した物と同様のからくりが仕組まれているのだろう。

お陰で、ゴンドラの乗組員には、ゴンドラがどこへ向かっているのか、確認のしようがなかった。

惑星アースに近づいているのだろうという予測は立ったが、周囲の状態が見えないままで、ただ急速に下へ向かって引っ張られている感覚は、嫌でも三人の心理的不安感を煽らずにはいられない。

もし、このまま惑星アースに直撃して粉々に砕け散ったら……このままどこまでも深い洞穴の深奥に嵌り込んで、二度と抜け出せなくなったら……次から次へと不吉な予感が頭を掠めて、思わず恐慌の叫び声を上げそうになるのを、奥歯をグッと噛み締めて必死に耐えていた。

そんな不安な時が永遠に続くかに思えた瞬間、ふとゴンドラ全体が浮き上がる様な錯覚に囚われ、そのタイミングに合わせる様にして、辺りを覆っていた激しい振動と騒音が次第に収まっていった。

それでも、徐々にではあるが下に落ちていると言う感覚だけは僅かに継続していた。

——第四の門を無事に潜り抜けたのだろうか？

それから数分の間、氷の上を滑らかに滑る様に、音もなく徐々に落下するゴンドラの中で、乗組員は息を潜めて目的地に無事到着する瞬間を待ち侘びていた。

しかし、そんな三人に突如襲い掛かったのは、足元から突き上げる激しい衝撃と、岩の塊が擦れ合って削れる様な、ガリガリというけたたましい騒音だった。

「どうしたんだ！」

余りに激しい上下動の為、一言でも喋った途端に舌を噛みそうだった。

きっとシートベルトで座席に嚴重に固定されていなければ、激しい衝撃の余り、体中をゴンドラの壁や天井に何度も打ち付けていたに違いない。

ゴンドラは足元から立て続けにガリガリと騒音を撒き散らしながら、それでも徐々に速度を落としている。

そのまましばらく上下左右に揺さぶられた末、ようやくゴンドラは動きを止めた。

少々荒々しくはあったが、無事第四の門を通り抜けて惑星アースに辿り着いたのだろうか？

\*

「惑星アースに辿り着いたのだろうか？」

「到着と言うにはかなり乱暴だが……」

ドーレスの問いかけに、タルカンが不安げに應える。

「確か、第四の門を過ぎると、じきに第五の門があるのではなかったかな？ サムソン」

「ええ、その筈です。ただし、第五の門がどこにあって、一体どの様なものなのかは、『エルダ記』にも記されておられませんので……」

「いずれにしても、次の門に辿り着く為には、このゴンドラを降りるしかないのだろうか？」

「恐らくは……」

「しかし、もし惑星アースが我々の先祖の望みに反して、未だに人の生存に適さない環境にあるとしたら、安易に外に出る訳にも行かないだろう」

「だからといって、このままゴンドラに閉じ込められていても、いずれ水も食料も尽き

てしまう」

「行くも地獄……留まるも……同じか」

「例えば、このゴンドラに、外へ出ても大丈夫かどうかを確かめる仕掛けは用意されていないのでしょうか？」

「それは自分も考えたが、先程からゴンドラの機械らしき仕掛けをどう触っても、一向に反応がない」

「それじゃあ、どうにも動きようがないじゃないですか。どうするんです？ ドーレスさん」

「それは、私達が惑星マルスを離れる時点で、既に引き返す事は出来なかったのだから、先へ進むしか道は残されていないだろう。こういう時こそ、冷静に自分の置かれた状況を分析しなくてはならない」

「そうですね」

サムソンの返答に、タルカンも無言で頷く。

「『エルダ記』が書かれたのは、エルダが実際に神の国を訪れ、何らかの方法で再び惑星マルスに戻って来た後なのだろう。『エルダ記』の信憑性については、今現在私達が惑星アースらしき星に辿り着いた……という一点を持って、ほぼ明らかだと思う。つまり、『エルダ記』が事実に基づいた記録であるなら、我々が再び惑星マルスに帰還する方法はある筈だ。問題は、何故エルダが第五の門に関する記述を避け、それ以降について殆ど何も語っていないのか、と言う事だ」

「何らかの理由があって、ワザと伏せておいたのですか？」

「その理由とは？ ……いずれにしても、今我々に出来る事は、エルダの辿ったであろう道を追って、神々の国へ辿り着く事だ。きっと神の国へ辿り着けば、惑星マルスが直面する危機を回避する方法も見つかるだろうし、再び惑星マルスへ戻る手段も残されている……私はそう信じたい」

「そうだな。神の国の存在を信じなければ、我々の運命もこのまま尽き果てる」

三人はその言葉の意味を噛み締める様に、大きく深く頷いた。

ゴンドラは最早反応せず、ここに留まる訳にはいかない。

であれば、僅かな可能性に掛けて先へ進むしかないではないか。

そうと決まれば、限られた食料と水がなくなる前に、何とか第五の門を潜り抜けなくてはならない。

決意を固めた我々には、いつまでもこの場に留まり続けても、時間の無駄遣いにしかならない。

「では、俺がゴンドラの扉を開けよう。皆、覚悟は良いか？」

タルカンが一足早くゴンドラの座席から腰を上げ、七日前にこのゴンドラに乗り込んだ扉の前に立った。

無言のまま二人が応じて頷くのを確認すると、タルカンは隙間なく閉じられた扉に手を掛け、渾身の力を振り絞ってスライドさせた。

——キィー……。

けたたましい鉄の軋み音を伴って、少しずつ開いてゆく扉の隙間から、頬を強く叩く暴風が入り込む。

更にタルカンが腕に力を込めると、小さな扉は遂に開け放たれ、その向こうに広がる光景に三人は思わず息を呑んだ。

左右に吹き荒れる乱気流に煽られて舞い散る黄砂の土煙に霞んで見えたのは、延々と続く赤茶けた土と岩と瓦礫に覆い尽くされた荒野だった。

辛うじて空気は人の呼吸を妨げる事はなかったが、それ以外に生命の息吹を感じさせる存在は見当たらなかった。

「どういう事なんだ、これは」

「まさか、この荒野が第五の門……なんて事はないでしょうね？」

「もしくは、神の国なんて元々なかったのか、あるいは何らかの原因で滅んでしまった後なのか……」

「だったら、なぜ『エルダ記』なんかが書かれたと……」

「それを確認する為にも、我々は先に進むしかない。もしかしたら、この荒野の果てに第五の門があって、その先には神の国が我々の到着を待ち受けているかもしれないのだから」

「ドーレスさんだって、この光景を見れば『惑星アースに神の国があるなんて嘘っぱちだ』って、思っているんでしょう？」

「もちろん、落胆はした。でも、まだ希望を完全に失った訳ではないよ。この荒野の先に第五の門や神の国が存在しないなんて、荒野の向こう側へ行って見なくては確認出来ないのだから」

「それはそうですが……」

「どちらを向いても似た様な景色で、どの方向に第五の門とやらがあるのか見当も付かないが……ドーレスさん、あんた決めてくれるかい？」

すっかり荒れ果てた大地の様子を見て取り乱すサムソンと違って、技師のタルカンは殆ど感情を表に出さなかったが、ドーレス同様、まだ完全に諦めた訳ではなさそうだ。

こういう極限状態にあって、自分と同様まだ望みを失わない強靱なタルカンの精神力に、ドーレスは心強さを感じた。

大抵の人間ならサムソンの様に動揺を表に出して、返って取り返しの付かない状況に陥ってしまうのは仕方ない反応だが、タルカンがいてくれるお陰で、ドーレスも冷静さを何とか失わずにいる事が出来た。

無残な傷跡を刻んだゴンドラの傍らの赤茶けた大地に、サムソンは心ここにあらずといった表情のまま座り込み、声にもならぬうわ言を口の中でひたすら呟いていた。

「サムソン……」

ドーレスがサムソンの元に膝をつき、背中を優しく覆い隠す様にして抱き締めると、サムソンはドーレスの腕の中で小さくむせび泣いている様だった。

「さあ、サムソン。立ち上がって。我々には、まだやるべき事が残されている」  
しばらくして、ようやく少しは気持ちの落ち着きを取り戻したサムソンに向かって、ドーレスは静かに囁いた。

「はい……」

二人が立ち上がるのを待って、それまで傍らで四方の大地の果てに視線を向けていたタルカンが、ドーレスに向かって口を開く。

「さて、どちらへ向かう？ どこを見ても、果てしなく赤茶けた荒野が続いている様に見えるが……」

「こちら……ですかね」

ドーレスは無意識のうちにある方角を指差していた。

その先に第五の門があるという根拠は無い。

確信も無い。

ただの勘だ。

いずれの方向へ向かおうと、第五の門に辿り着く可能性は限りなく少ない。

しかし、今はただ、ほんの少しでも可能性があると思われる物には何でも縋り付いて、その先に僅かでも望みが繋がれば良い。

そんな心境だった。

「OK。それじゃあいくかい。ドーレスさん」

そういつて平然と一歩を踏み出すタルカンの強靭さが、今は心強かった。

そうだ。

いずれにしても、最初の一步を踏み出さなくては、永遠に望みは絶たれてしまうのだ。

「さあ、我々も行きましょう、サムソン」

ドーレスはサムソンに声をかけると、前を行くタルカンの背中を追った。

(了)

HP 【Blankfolder】

<http://blankfolder.huuryuu.com/>

<http://blankfolder.blog.shinobi.jp/>

Copyright(C) 2006-2007 【Blankfolder】 こりん, All Rights Reserved.

本ファイルの二次配布はご遠慮下さい。

本作品へのお問い合わせは上記 HP にて受け付けております。

本作品に対するご意見、ご感想は上記 Blog でもお受けしております。